琉球大学学術リポジトリ

巻頭言：脱石油一歩後退

メタデータ	言語:
	出版者: 南方資源利用技術研究会
	公開日: 2014-10-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤山, 虎也
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017496

【巻　頭　言】

脱石油一歩後退

「本課題は、総合エネルギー調査会（通産大臣諮問機関）の報告書を紹介した沖縄タイムス（５８．８．２　記事）の見出しである」

（沖縄協会　藤山　虎也）

さて、昭和２５年頃という古い話であるが、新しいものに直ぐとびつく癖のある私は、蓋をとると、ポッと火のつくライターを得意気に持ち歩いていた。原理は白金懐炉と同じで、気化したガスが金属線を白熱させ、このガスにポッと点化するという仕組みである。買ったのが夏で、段々寒く成るにつれて予め暖めてやらないと点火しなくなり、それこそ肌で暖めても駄目という仕儀、説明書を読み返してみると、曰く「どうしても点火しない時はマッチでつけて下さい」。

風力、波力、太陽熱といった無限エネルギー源を利用する場合、これに有限エネルギーである燃料資源の助けを借りると、大体が３年単位でしか物事を見ない近視大国では、早速、経済性が云々される。

どうもライターの例は適切でなかったが、過去の例を挙げると、単細胞の緑藻であるクロレラが，光合成の際、炭素源として有機酸でもよいことに着目し、河川に排出される屎尿処理場の排水の浄化が試みられた。当時の大阪府衛生研究所（現環境科学研究所）が、実験用のプラントを守口市の処理場内に建て、詳細なデーターを報告している。問題は太陽エネルギー利用度の少ない冬季は、陸上の施設でもあり水温も低く、悪い条件が重なるので、螢光灯の助けを借りることになる。原屎尿の１０倍稀釈液で、５ℓに対して１０Wの螢光灯（１日１ℓ当りの電力１ｋｗ）、クロレラは細胞数１８～２６×１０^{6}／ｍℓを使用して、７日後、ＢＯＤの除去率３１～４１％、ＣＯＤの除去率６８～７３％、有機酸６８～７３％、生産されたクロレラは乾物で５８０～８３０ｍｇ／ℓである。これは一例であるが、生産された乾燥クロレラは豚や鶏の餌料として売ってペイしようというわけだったが、これは到底無理ということで、私が訪ねた時は、塔が残っている丈であった。電力を使うと生産費が割高に

なるという、至極当り前の結果で、とり止めになった。浄化という点を重視すれば公共事業としては採算を度外視してもよいのではあるまいか。しかし再開可能なデーターは得られているのが救いである。

表題の「脱石油一歩後退」の内容であるが、調査会はエネルギー政策の基本方針として、「長期エネルギー需給見通しとエネルギー政策の総合点検について」と題する報告書をまとめている。要点は、従来通りの安定供給確保に加えて、エネルギーコストの低減を図ること、すなわち経済性を重視しようというわけである。世界的な石油需要の減少から、ＯＰＥＣの原油値下げによるエネルギー事情の変化に対応しようとしているわけで、太陽熱発電が早速槍玉にあがっている。化石燃料の枯渇といった大問題は何処かにすっとんでしまっている。現在進められている、あるいは企画されている石油の代替エネルギーとしてのバイオマス利用、雨が降ると忽ち話の聞かれなくなる海水の淡水化など、施設費、運転費、維持費を差し引いてなおペイするものがどの位あるだろうか。経済性重視ということでは、無限エネルギー利用の数例しか生き残れない。同調査会が、昭和７５年（２０００年）までの長期展望をまとめる由で、１０年足らず先が、長期と成っている所が、如何にも我国らしい。

経済的にペイしなくとも、やらざるを得なくなる時が、やがて来る事必至である。長期という以上、５０年位先を予見して欲しいものである。